

シリーズ 社協茶論 No.1

わたしがはじめた福祉活動のきっかけ



目の前の日々を大切に。

代表 勅使河原航さん

てしがはら わたる

祖父の死と熊本地震災災害支援がきっかけで北九州にUターンされた勅使河原さん。大学特任教員の次に歩んだ人生の新たな一歩は起業でした。令和5年7月に開設して7ヶ月が経つ「ふらっとハウス」のことを伺いました。

●いくつになっても友達ができる コミュニティを育みたい

——「ふらっとハウス」を始めたいきっかけは？

ふらっとハウスを具体的に考え始めたのは、北九州市立大学での特任教員の任期が最終となった5年目でした。大学教員のキャリアを目指すことも考えましたが、社会福祉士・ソーシャルワーカーとして、関西で学んだ経験を故郷北九州で実践していきたいという思いがどんどん強くなりました。特



勅使河原さん(左)と
沼田さん(右)

任教員になる前は、関西の大学で社会福祉を学び、関西で社会福祉協議会に就職しました。社会福祉協議会では、高齢者や障害のある人の相談支援と地域のボランティア活動などの推進に従事していましたが、北九州にUターンしてからは、認知症のボランティア活動や若年性認知症と家族が運営するデイサービスで働かせていただきたながら、認知症をテーマに取り組んでいました。

「ふらっとハウス」という名には、「介護する、されるという関係ではなく、ふらっとで良い関係」などの意味があり、いくつになっても友達ができるコミュニティを目指して運営しています。この間、ふらっとハウスはどんなところがメンバーさんに感想を伺った、「Uターン話ができて、付き合いたい、生まれる」「Uターンを道になんていい」などの話がありました。少しずつコミュニティができています。

●寝てはなぐさねが持つ瞬間

—— 皆さんの生き生きと穏やかな笑顔です。

開所後に気づかされたこともたくさんあります。デイサービスではスケジュールがあり、レクリエーションをするのが一般的かと思えます。ふらっとハウスは、スケジュールがないのでメンバーさんと、「今日何をするか」を決めています。

「スケジュールがないと大変じゃないですか？」と聞かれますが、ふらっとハウスを開設して7ヶ月が過ぎ、これまでの経験から、スタッフが何をするか決めすぎると、メンバーさんが受け身になりお客様になってしまいかねないと感じています。ふらっとハウスは「生活の場」であり、いくつになっても友達ができるコミュニティを目指しているので、メンバーさんの人生経験や会話からアイデアやアドバイスをもらったりしながら、日々を送っています。メンバーさんが「藁あるよ、みんなでしめ縄作れないかな？」と提案したり、メンバーさんの希望で風食のメニューが変わることもあります。生活ってスケジュール通りにいかないものなので、それもよしです。これからは、メンバーさんとともに、わいわい楽しみながら、良い一日を送っていきけるように取り組んでいきたいと思えます。